

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 楊 韻

論文題目 張愛玲研究：その視覚的表現における美学

論文審査担当者

主 査 名古屋大学教授 星野 幸代

委 員 名古屋大学教授 胡 潔

委 員 名古屋大学准教授 田村 加代子

本論文は、中国近現代作家・張愛玲の作品における絵画、詩歌、服飾に関する主張に着目し、張愛玲の審美眼ないし彼女の芸術、文学、当時の社会に対する〈傍観者〉たる姿勢および〈見られる者・抵抗者〉たる姿勢の成立を究明した上で、出版メディアにおける女流作家「張愛玲」イメージに対する張愛玲のセルフプロデュース戦略を明らかにすることを目的としている。以下、本論文の概要と審査結果を報告する。

[本論文の概要]

序章では、先行研究について整理し、本研究の問題意識と目的、方法について述べている。

従来の張愛玲研究の多くは、伝記的な事項にかかる考察、また彼女の小説作品を対象とした分析が主であった。張愛玲は自らの作品に対して膨大な表紙画、挿絵を手掛けただけでなく、彼女の自画像や写真家によるポートレートは雑誌、作品に多く掲載されている。それにも関わらず、それらに対する考察は、奇矯な女性作家としての一面として作家論の中で取り上げられるか、或いは作品論に関連して言及される程度に留まっていた。張愛玲の詩歌作品研究については、その詩作品、翻訳詩、引用した詩歌が詩集にまとめられることなく、エッセイと一体化しているためか、専ら詩歌について論じた研究は皆無に近かった。いっぽう、張愛玲作品の服飾描写は小説における人物を理解するための描写という位置づけで研究されてきた。これらの従来脈絡なく言及されてきた要素に対し、本研究は絵画、詩歌、服飾にかかる表現を、張愛玲の審美観とセルフイメージを構成する要素として総合的に考察することによって、先行研究でもキーワードの一つとされてきた〈傍観者〉たる姿勢を明らかにするだけでなく、それに対する〈見られる者・抵抗者〉たる姿勢を読み取ることを目的としている。

第一章では、張愛玲が描いた挿絵、作成したコラージュ、ポートレートおよび彼女の絵画エッセイ「忘不了の画」(1944)、「談画」(1944)を主として分析し、彼女の美的観照を考察した。張愛玲は印象派後期の画家ポール・セザンヌが人物画を通してその内面を描いたとして評価しており、彼女の挿絵として描いた人物像にもその影響が見られる。セザンヌに次いで、張愛玲は米国の女性画家ドリス・リーに興味を示し、ドリス・リーが描く日常的な主婦や子どもたちの光景について、一般評に反し、その色彩を通じて大恐慌時代の精神的苦痛を描いたと解釈している。それは、彼女が恐慌下の米国を淪陥期上海の状況に重ねたからであると考えられる。日本の浮世絵について、張愛玲は賛否両論を述べているが、主調としては芸を売る女性としての芸者に対する強い興味と男性社会への批判を示している。総じて張愛玲自ら手掛けた多くの表紙絵、挿絵には、伝統社会における女性を外側から傍観する彼女の姿勢がうかがわれる。いっぽう、張愛玲は雑誌メディアから文壇のスターとして記号化される傾向にあった。しかし、掲載された写真をめぐる証言や彼女自身のエッセイを照合すると、彼女は出版メディアの商業的戦略を逆手に取り、レイ・チョウのいう「露出趣味」によって見せたい自分を演出し、〈見る〉男性社会、〈見られる〉女性というジェンダー秩序に抵抗していたと解釈できる。

第二章では、張愛玲の詩歌作品の創作経緯と創作意図、また彼女がエッセイ内で言及した詩歌とそれに対する解釈を考察し、そこに〈傍観者〉および〈見られる者・抵抗者〉たる姿勢がどのように反映されているかを明らかにしている。張愛玲は中国 1920 年代に主流であった新体詩には批判的

であり、また 1930 年代以降の左翼文芸の革命詩には態度を示さない。彼女はそのいずれの流派にも距離を置く詩人路易士（1913－2013）の素朴な日常の心理の機微を詠う詩境について、むしろそれが時間空間を超えた永続性のある表現として評価した。いっぽうで、シュールレアリズムの手法を採り入れた詩にも興味を示し、自分の小説作品に採り入れた形跡がある。英国詩については、ミッシン・スクールで教育を受けた経緯からブラウニングにしばしば言及があるが、特に自らの少女時代の体験に重ねて受容されたのはビバリー・ニコルスの詩であり、その影響下における初期創作に、〈見られる者・抵抗者〉たる姿勢が読み取れる。1940 年代戦時期の彼女の創作詩には死の日常性への解悟が読み取れると同時に、自らの生活を伝奇のように捉えており、いずれも彼女の〈傍観者〉としての姿勢と生命への美学が読み取れる。晩年、米国亡命後の詩作品には、さらに〈見られる〉ことを受け入れてその無力感を乗り越え、自ら揶揄する姿勢が見られる。

第三章第一節では、まず張愛玲と服飾との関わりをエッセイ、小説、書簡を対象とし、彼女の服飾感がどのように形成されたかを小説作品と照合しながら検討した。その上で、文学における全知の立場に置かれた語り手に着目し、〈見せる〉道具としての服飾がいかに語られているかを通じて〈傍観者〉としての姿勢を考察している。香港大学在学中、張愛玲は作家・服飾研究家・許地山（1894－1941）の講義を受け、その思想の影響を受けた。彼女のエッセイ「更衣記」およびその英文版 Chinese Life and Fashions（1943）は許地山の学術論文「近三百年來底中国女装」（1935）を参考に、英語圏の読者を意識して書いたものである。双方を照合すると、張愛玲は中国人女性を拘束する衣服の側面に関心を持ち、清朝女性的美徳を演出するための道具としての衣服を記述している。その意匠を凝らしたディテールの丹念な描写には張愛玲の美的観照が読み取れるのに反して、文全体の主張としては、有閑階級の生活を反映するものであるそのようなディテールの暫時的消滅に賛同するという矛盾した姿勢が読み取れる。なお、髪型の歴史的変遷のくだりでは、許だけでなく林紘「髻史」（1934）をも参照したことが明らかである。総じて「更衣記」には服装統制の時代の女性に対する張愛玲の共感がうかがわれ、女性の立場で語りなおした服飾史であるといえる。服飾描写が効果的に作用している小説としては「第一炉香」を取り上げ、その服飾描写を細かく分析した。

「第一炉香」は、女学生の制服から高級娼館における豪華な衣装とアクセサリにいたるまで多様な服飾の描写が登場する。そこには、香港政府が欧米人の期待に応えるために清朝の遺風のある制服を設定し、娼館も中国風である等、政治社会を反映したファッションに対する張愛玲の批判的視点が読み取れる。第三章第二節では、雑誌メディアとその傘下の大衆から〈見られる者〉であった張愛玲の〈抵抗者〉としての姿勢を、新聞雑誌記事および彼女のエッセイから考察している。張愛玲のエッセイから、彼女が女性を受動的に〈見られる〉存在であることを意識する一方、衣服をセルフプロデュースのための一種の言語としてとらえて利用していたことが読み取れる。当時の雑誌記事は他の女性作家とは異なる張愛玲の奇抜な服装を、しばしばディテールにいたるまで報じた。それらから、張愛玲が〈見られる者〉として雑誌社や読者の期待に応えつつ、見せたい自分を演出することで抵抗しており、服飾をカムフラージュとして意図的に利用していたと解釈できる。

総じて本論は、張愛玲の絵画、詩歌作品および服飾に関する視覚的表現とパフォーマンスに着目して考察するプロセスに依り、彼女の〈傍観者〉としての姿勢の成立と、〈見られる者・抵抗者〉と

しての彼女の戦略的セルフプロデュースを明らかにした。こうした姿勢の形成は、淪陷区の上海文壇で一世を風靡した女流作家たちが雑誌メディアのスターシステムに取り込まれ、その結果、彼女たちが大衆からジェンダー役割を期待され、〈見られる〉対象となったことに起因している。張愛玲はその期待に対して戦略的に「露出」した張愛玲像を演出することで、〈見られる者・抵抗者〉としてメディアの欲望に抵抗し、女性作家としての主体性を取り戻そうとした。さらにそれは日本の傀儡政権下において、中国のレトロなファッションを装う女流作家というイメージに自らを封じ込め、それによって政治的発言から自己防衛する戦略でもあったと言える。

〔論文の評価〕

張愛玲研究は、名家に生まれ政治上の有力者とかかわり、建国後に亡命したというその数奇な生涯のために伝記的研究が多い。またベストセラーの小説家であったために、作品研究の分野では小説を対象とするものが大部分を占めている。それに対し本論文は、絵画、詩歌という、張愛玲研究の中で少なからず言及はされながらも専論、論著などまとまった研究が見られなかった対象を取り上げ、さらに或る程度研究の蓄積がある服飾を加え、三ジャンルの内容を「視覚的表現における美学」というカテゴリーでとらえ、それらの分析のプロセスによって張愛玲の〈傍観者〉、〈見られる者・抵抗者〉を読み解こうとした。その挑戦的な姿勢は高く評価でき、結果として総じて説得力を持って論じ切ったと言える。特に絵画と詩歌に周到な分析を施し、張愛玲の視覚的美学を想起させる対象としてとらえ直した帰結は、張愛玲研究の新たな側面を開拓したと言える。多くの中国現代詩に対して精緻な読解を基とした和訳に苦心して取り組んだ点も高く評価したい。さらに申請者の資質として、詩歌論だけでなく絵画、服飾を分析する論述においても言葉の選択に際立った詩情がうかがわれ、その上で明解な論理が展開されている。なお、エッセイ「更衣記」が踏まえている許地山と林紓の著作との詳細な照合など、張愛玲作品の制作過程においてもいくつか重要な考証を行っており、その手腕も高く評価できる。

反面、設定した枠組みを貫こうとするあまり、時として牽強附会とも思われる論述が少々見られた。例えば第二章前段で西行の歌の周作人訳に出て来る言葉「苦竹」は、日本語を解しなかった張愛玲ないし彼女と往来した文人の文章を論じる際には、原文である和歌の解釈ではなく、むしろ民国知識人における詩文の教養といった文脈の中で考察を深めるべきなのではなかろうか。こうした問題は、当時の政治的・文壇史的背景を踏まえて、張愛玲の文章の論法をより丁寧に追うことで説得力を持たせられよう。また発展的な問題として、現状では張愛玲の作品からうかがわれる芸術観、服飾観を論じるいっぽうで彼女の服飾を利用した自己演出が別途議論されているのだが、張愛玲の美的観照は彼女の服飾を通じたパフォーマンスにどのように表れていたのであろうか。美的観照とパフォーマンス双方を有機的に関連付けていくことが今後の課題として挙げられる。また、申請者が独自の設定において使用する用語についても、さらに説明不足のところが散見される。

しかしこれらの課題は本論文の全体的な評価を損ねるものではない。本論文は、上述の通り丹念な原典読解を基盤とし豊かなオリジナリティを有する論文だと言える。中国近現代文学史という側面に於いては、1930年代の雑誌メディアにおけるヴィジュアル戦略の流れを受け、淪陷区上海で日本の傀儡政権による言論統制のもと女性文学が突如一世を風靡した要因を究明する上でも、優れた貢献を成したと言える。

従って、論文審査委員は全員一致で、本論が博士学位論文として水準に達していると判断した。